

澤田辰徳●編

齋藤佑樹, 上江洲 聖, 友利幸之介●編集協力

作業で結ぶマネジメント

作業療法士のための自分づくり・仲間づくり・組織づくり

評者 土井勝幸

日本作業療法士協会副会長

2016年に札幌で開催された第50回日本作業療法士学会の会場に到着し、真っ先に書籍コーナーで本書を買い求めた。探すつもりであったがその必要はなく、一番目立つところに山積みされていた。書籍展示の担当者に聞いたところ、「本学会での書籍販売としては一番の売れ行きです」とにこやかに紹介していたのが印象的であった。

本書に惹かれた理由は、副題の「作業療法士のための自分づくり・仲間づくり・組織づくり」という文言に心が動いたからである。

今から25年前、東京の大きな組織で6年間臨床を経験した後、作業療法士が誰ひとりいない地方の一人職場に自ら移り、使命感に燃えて地域作業療法に取り組むこととした。しかし、多職種との連携、組織の壁、作業療法への無理解、これらが背景となる人間関係……言葉では言い尽くせないジレンマを抱えることとなった。作業療法をしたいという叫びは誰にも届かなかった、というよりは届けられない自分がいた。不本意ではあったが深い挫折とともにその職場を去ることとした。そのときに私は、丁寧な作業療法を実践するためには、環境そのものを作業療法する必要性と、その環境づくりのために組織をマネジメントする立場にならなければいけないと考えた。その後、紆余曲折を経てリハビリテーション専門職としては日本で最初に、介護老人保健施設の管理者となり、現在、作業療法を形にする環境づくりに取り組んでいる。

今も多くの若い作業療法士は、当時私が抱えたジレンマに近いものを感じているに違いない。現行の医療・介護保険制度のいずれも、時間の枠に縛られる作業療法となっており、結果として、生活を支援する具体的な作業療法が実践しにくい環境にある。一方、現行制度の枠組みの中で、対象者にとって“意味のある作業”に取り組んでいる丁寧な作業療法の

実践報告を聞くことがあるが、その多くで、職場の環境がマネジメントされていることに気付く。

本書の1章「作業に焦点を当てたマネジメント」では、作業療法の専門性を生かすためにはマネジメントが重要であることをまさに強烈に表現している。意図的に構成していると思われるが、短いセンテンスで臨床・教育・研究とさまざまな視点から作業に焦点を当て、マネジメントの持つ意味を丁寧にわかりやすく解説している。

本書を一言で表するとすれば、執筆者の方々には失礼な表現となるかもしれないが“おもしろい”である。日頃専門書に手が届くことがない方がいるとすれば、間違いなく本書は読むことができ、専門書特有のくどさを感じられないことを伝えたい。その理由は、執筆者がいずれも作業療法を丁寧に実践している作業療法士だから共感できるためだと思う。

そして、執筆者一覧を見てほしい。これからの作業療法を支える実力者が並んでおり、よくこれだけのさまざまな領域、分野のエキスパートを揃えることができたものだと感嘆する。

作業療法の未来を見据えるだけでなく、“作業”の持つ力を再考させてくれる本書を、日々にジレンマを感じている作業療法士に手にしてほしいと心から願う。

B5判・208頁
定価：本体3,500円＋税
医学書院刊、2016年